

Title	D・ハンフレイ著 アメリカの輸入
Sub Title	Don D. Humphrey, American imports
Author	白石, 孝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.1 (1957. 1) ,p.59(59)- 60(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19570101-0059
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570101-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ようとしており、經濟史の研究において新しい物價史が占める位置は益々増大して來ている。

しかし他面、その基底においてこれら物價史家が物價の動きの原因を貴金屬の供給の變化に求めていたことは、一部の經濟史家の批判するところとなつた。例えばAbel, W., Postan, M. M. 等は、もし貴金屬の供給における變化が何よりも信頼すべきものとするれば、價格の上昇・下落はすべてのものについて同様であるだろう、ところが中世末については農産物の上昇・下落が工業生産物の上昇・下落よりも早く且つ激しかったことから、この事實は、人口における變化によつて以外に満足に説明することが出來ないと考へた。彼等のこの論理は第九回國際歴史學會での Postan の發言のなかで巧妙に展開されていた。外的要因によつてでなく、經濟の内部的發展から物價の動きを説明しようとする立場で、完成を今後にまつべき重要な提言であつた。

月刊 三色旗 一月號

青年の頭……………板倉卓造
 雄辯……………高橋誠一郎
 隨想……………西本辰之助
 偶感……………潮田江次
 言葉づかい……………内山正熊

國際政局の背景……………野村兼太郎

ハワイたより……………佐藤朔

フランスの大學生……………澤田允茂

「アメリカハーバード大學、哲學」……………村松暎

新中國の表情……………矢内原勝

海外の旅と生活から……………野村光一

西アフリカ紀行……………野村光一

音樂の本質に就いて……………野村光一

——音樂講座(一)——

◇定價一部三〇圓・一年三六〇圓・書店へ直接御申込下さい。

東京都高輪局 慶應通信
三田豐岡町八 (振替東京一五五四九七番)

D・ハンフレイ著

『アメリカの輸入』

Don D. Humphrey, American Imports, 1955. New York. (A Study jointly sponsored by the Twentieth Century Fund and the National Planning Association with a policy statement by the Association's Committee on International Policy.)

現在の國際經濟の不安定乃至不均衡の要因の一つは、米國の輸入が相對的に少なすぎることである。これは既に第一次大戰後問題になつたところであるが、更に今次大戰後ではドル不足に現れ一層重要な問題として世界の關心事となつた。本書はこのように注目をあびている米國の輸入を歴史的に分析し、その長期減少傾向を指摘すると共に、その輸入政策を論評するものである。殊に興味のあるのは輸入を經濟成長と景氣變動から考察するばかりでなく、輸入政策の作用をも統計的に検討していること、またこのハンフレイ教授の結論からスポンサーたる National Planning Association の政策委員達が米國の輸入政策に署名入のステートメントを収めていることである。

現在の米國の國際的地位は Non-Soviet World を強化する手段を提供するところにあるが、この機能を果たすには對外經濟政策が適切であることを要する (pp. 94-96)。しかるに米國の輸入が少な

書評及び紹介

すぎることは Non-Soviet World の諸國に非常に困難を興えている。ドル不足という現象も結局はここに歸せられるわけで、これをまずいかに調整するかが充分検討されねばならない。しかしそれは米國の輸入の歴史的分析が必要である。

輸入の長期的傾向を考へる場合には、その國の經濟成長と景氣循環、更に貿易政策の變化の三つの條件との關係を求めなくてはならぬ。今、米國の經濟成長と輸入についてみるならば次のような諸點が指摘され得るであろう (p. 17)。

第一は南北戰爭から一八九〇年代までと、一九三〇年代まで輸入と國內生産出高の成長がペースを保つていたが、第十九世紀後半及び一九三七年以降になると、國內品のそれがかかる輸入のそれをこえている。換言すれば米國の輸入價額は勿論年々増加しているとしても、國內生産出高と比較するとその成長が小なりつつある。これは今後益々顯著であろう。第二は輸入構成の變化のうち、粗原料の割合が第一次大戰以後減少し、次第にその相對的重要度を減じつつあることである。これは天然輸入原料より化學原料生産への轉換を反映するものとして注目に値する。第三は輸入品の高度集中化の傾向である。既に一九二九年より一九四九年には八品目のみが成長をみせており (p. 83) 今後は一層これに集中され、また將來五品目内外にまで集中化する傾向をもっている。従つて、前述の國內生産と比較しての輸入の成長率の減少はこのような輸入品の品種のシフトに大きく依存しているといふべく、これは世界的な長期の價額の趨勢の反面、米國の技術上の進歩によると考えられる (p. 86-88)。

五九 (五九)

かくして、米國の經濟成長、特に技術上の進歩、その方向をみるならば、米國の輸入の成長率は國內のそれに比して益々小なる傾向を必然的にもたらすといわなくてはならぬ。ここに米國の長期の輸入政策の問題が横たわっている。次に輸入の短期の變動についてみると、その景氣循環の作用は極めて大であることが指摘される。たとえば、一八九二―九四年の不況期には國內生産よりも二倍、一九〇八年のそれにも二倍、一九三七―三九年には更に五倍も下落の程度が大であつた。この理由は所謂彈力性からいい得るが、特に競争輸入品の不安定性が注目されねばならぬ。換言すれば比較生産費の短期の變動にほかならぬ(D. S.). 従つて外國の業者は不況期には一層米國市場で激しい競争を経験しなくてはならなくなる。

	Before any agreement	after agreement
1934 imports	46.7	15.0 (to Jan. 1, 1949)
1947 "	28.3	13.9 (to Jan. 1, 1951)
1949 "	25.8	12.2 (to Jan. 1, 1953)
1952 "	24.4	

p. 129 table

屢々米國の輸入についてこれが少ない理由にその高率關稅がとりあげられるが、確かに關稅の作用をみのがすことは出来ない。しかれば戦後の關稅低減の効果はどうであろうか。その前に戦後どれだけ關稅が實質的に引下げられたか。というのは平均稅率の比較では價格の上昇や輸入構成の變化が含まれていてこれが明確にされているからである(D. 129)。事實、Trade Agreementのもとにおいて一九三四年以降の平均稅率は上表の如く低下しているが、

しも輸入構成の變化なしとすれば、戦前・戦後とはその引下率は五%も餘計になる筈のものと算定される。即ち、平均稅率が引下げられても、もしも輸入構成が變化すれば、その一部は相殺されることを知らねばならぬ。しかし問題はその引下が米國の長期の輸入成長率の相對的減少をやや緩和し得ても増加せしめるものでないということである。保護貿易主義の傾向が今日猶多敷残つているもの、これはかかる米國の輸入の長期的傾向のもつ重要性を輕視して逆轉させるものでないし、むしろ、それでさえ米國は輸入が少いために諸外國をして代價支拂に困窮させる結果を生じつつあるのである。幸いに米國の輿論には自由貿易への移行がみられる(chap. 7)。この際、前述の米國の國際的地位と責任において、關稅低減の問題を考へるべきであらう。

このハンフレイの議論からステーツメントは更に、米國の業者、從業員、地方委員に貿易制限の低下の有利な効果を説くこと、現行の關稅以外の極端な諸制限の改變を必要とすることを要請する(D. 514)。

以上おおよびに本書の概要を紹介した。殊に將來の米國の輸入について極めて國際經濟的に不均衡を大きくするという見方は重要であり、それだけに右の如き政策的要請のみで果して米國のもつチレンマが解決出来るかどうか疑問であらう。しかし焦點を米國の輸入にしばり、その成長を詳細にかつ明確に分析した本書の價値は大であるといわなくてはならぬ。まさに一讀に値する好著である。(白石 孝)

三菱經濟研究所

『世界貿易—自由化問題の背景』

最近の世界貿易の一つの大きな問題に、一九五〇年以降すめられてきた西歐諸國の貿易自由化がある。これについて既に多くの論説が發表せられ、筆者も世界經濟評論に「世界貿易自由化の過程」として検討した(一九五六・七)。本書もまたこうした現狀の問題をとらえて展望を試みているけれども、表題が示すように分析の焦點はその背後にある世界貿易の構造にむけられ、戦前戦後の諸變化を對象としていることは、一層廣い局面からの理解を興えるに役立つと思われる。しかもわが國で「世界貿易」に關するまとまつた著書が戦後わずかしかない折、本書の出版はまさに時機を得たものといひ得よう。

第一章では第二次大戰前の世界貿易・決済機構を回顧し、第二章では戦後の世界政治・經濟構造の變化を抽出する。ヴァルガと山本登教授の二書からまとめて、その本質的變化を、(1)相互に發展の仕方を異にする二つの陣營の形成・その對立の激化、(2)資本主義諸國の發展の不均等性の激化、(3)植民地・從屬國の變化の三點に求める。これを各節にわけて詳述するが、社會主義體制内諸國の發展過程については、著者も認めるように極めて大雑把である。それ以上にこの章の論述の仕方があいまいであるのはどうしたことか。たとえば、社會主義諸國の發展についての次の文を読む。

「その發展が、一方で『ソヴェト赤色帝國主義の擄取』といわれる援助、スターリンのいう『ただ一つの資本主義國も(興え得ないよ)うな)……: 効果的で技術的に質の高い』『その基礎には、互にたすけあつて全般的な經濟的高揚をかちとろうとする、真心こめた願望がよこたわつてゐる』『援助』すなわち『相互の緊密なる友好的』協力が大きくよつてゐることも否定出来ない。否そういつた社會主義的協力を基礎として、この陣營が成立し發展してゐるといわれる(七七頁)。

どうもこれでは表現が客觀的すぎて、本書がどうみているのかわからない。こうした例が隨所にみられるのである。また他方、社會主義諸國の分析が不充分にかかわらず、過大評價というか、或は多分に論評が一方に偏してゐるようである。そして「資本主義體制そのものへの打撃」を強調する。第三章では戦後の世界貿易の回復と變化から稿を起し、そこにいくつかの問題が指摘されている。殊に兩大戦後の比較が行われるが、第二次大戰後、工業生産の發展テンポに對する輸出發展テンポの相對的停滯について、これが「一般的に個々の國より市場の規模が縮小したこと、資本主義的世界市場が全體として狭くなつたことを示している(一〇三頁)」ということ解決づけるのは、重要な問題提示にかがわらず惜しまれる。ドル不足問題には項を改めて詳述し、その原因に關する國際經濟學的アプローチを紹介するが、これに満足せず「世界の政治・經濟構造の變化によつてもたらされたいわば『構造的』なるものとみるのである(一一八頁)」。そして多角的貿易・決済機構の崩壊道程をたどり、アメリカ・ヨーロッパ・東南アジアの貿易構造を分けて分